
花の言葉に思いを込めて

ayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の言葉に思いを込めて

【Nコード】

N0854R

【作者名】

ayu

【あらすじ】

梟の男の子ルイと、羊の女の子のクラリサ。

二人の時間的遠距離恋愛のお話。

いくらでも会える距離に暮らしてはいるけれど、生活サイクルが全く合わない！

（前書き）

楽しんでいてたければ幸いです。

甘いです。友人からは甘すぎて死にそうだと言われました。砂を吐くどころの騒ぎじゃないそうです。

ゆっくりと、夜が訪れようとしていた。

紅い夕日が少しずつ姿を隠し、星や月が淡く姿を見せ始める。

ルイは、ふああ、とひとつ大きな欠伸をすると、腕を伸ばし、背伸びをし、ぱちぱちと目を瞬かせた。

「……ようやく、夜かあ」

日が落ち、暗くなってきた頃からルイ活動時間になる。

ルイは夜に生きる、梟なのだ。

*

この世界には、とてもたくさんの人が暮らしている。

人間も、動物も、小人も、妖精も。

ルイは、『ハーフ』と呼ばれる人だった。ハーフというのは、半人が人で、半分が人では無い者の事。妖精だったり、動物だったり、それは人によって様々。また、夜だけ人になったり、動物になったり、妖精になったり、あるいは人の体に羽根や蹄、くちばしがついている、というように身体の一部だけが違っていたり、その姿も実に様々だ。

ルイは、夜になると人の姿になる梟だった。

まだ少しあどけなさの残る顔立ちに、すっきりと通った鼻筋。寝起きだからか、普段はきりりと意志の強そうな金色の瞳は、眠たげに半分とじられている。

ルイはひとつ欠伸をしながら暖かいベッドから身体を起こし、顔を洗い、先日買ったばかりのシャツに袖を通した。皺ひとつない糊の効いたシャツに、藍色のリボンタイ、黒地に、細く銀色のストラ

イプが入ったベスト。白とブラウンの斑模様の髪を良く梳かし、長い襟足を黒のリボンできゅっと結んで身だしなみを整える。

「これで大丈夫、かな」

一番気に入っている帽子を被り、一番気に入っている靴を履き、姿見の前でくると一回り。そして最後に笑顔の練習。

「ああ、全く」

ルイはどこか楽しげに溜め息を吐く。そして美しくラッピングされた小さな箱をポケットに入れると、忘れ物はないねと辺りを確認した。

「ハーフというのは随分と厄介だね」

呟いて、ルイは高い木の上にある家の窓からぴょんと飛び出し、舞い降りるように着地した。人間の姿をしているときに空を飛ぶ事は出来ないが、それでも梟の身体能力は伊達ではない。

「さあて、僕の可愛い眠り姫に会いに行かなきゃ」

鼻歌交じりにそう言っ、ルイは歩きだした。そうだ花屋にも寄って行こう、などと言いながら、浮かれて、スキップでもしてしまいそうなくらいご機嫌に。愛の歌を歌いながら、ルイは愛しい恋人の元へと急いでいった。

2

「ようやく、夜ねえ」

クラリサは今にも閉じてしまいそうな目を擦り、まだ眠らないようにとコーヒーを啜った。眠いけれど、愛しい彼は夜行性。生態に文句など言えるものではないから、コーヒーのカフェインに睡魔を散らしてとお願いをする。

こんな時、魔法が使えたらどんなに良いかしら。そうしたら、眠気なんかなくしてしまえるのに。彼のもとへ飛んでいく事だってできるのに。

「ちちんぷいぷいびびでばびでぶ……」

なんて、小さな声で呟いてみるけれど、やっぱり眠気はそのまま
で、クラリサはひとつ、深い溜め息を吐く。

時計の針は、そろそろ夜の十時を指そうとしていた。

普通の人間ならまだまだ起きていられる時間なのだろうけれど、
生憎、クラリサは普通の人間ではなかった。クラリサはくるりと巻
いた角とふわふわの髪がチャームポイントの、羊と人のハーフだっ
た。

「……もう眠たいわ」

でも、会える時間はとても限られている。

ふああ、と欠伸をして、クラリサはテーブルに突っ伏した。角が
当たり、かつん、と小さく音を立てる。来たのがすぐ分かるように
と開け放たれた窓から入ってくるのは、冷たく寂しい夜風だけ。

「早く来てくれなきゃ、寝ちゃうわよう」

不満げに、唇をつんと尖らせた。ついでに頬もぷくりと膨らませ、
恋人への不満を募らせる。この前だって、遊びに来たとたんに睡魔
に負けて眠ってしまったのだ。目が覚めたらクラリサは自分のベッ
ドの上だった。そして、テーブルの上には一枚の手紙。

おはよう。可愛い寝顔は頂いたよ、お姫様

なんて気障な人かしら。そう思っても、想う度に愛しただけが募
ってしまふ。たまにはゆっくり一緒に居たいと思うのは、ごく自然
なことだ。一緒にお茶を飲んで、お菓子を食べて、二人の今後につ
いて夢や理想や憧れを織り交ぜながら静かに語り合う。せめて月に
一回くらいはそういう時間が欲しい。

とは言え、昼行性の自分に対し、彼は夜行性。何をどう頑張って
もすれ違いは起きてしまふ。これを、クラリサは時間的遠距離恋愛
と呼んでいた。

クラリサはもう一度、大きな欠伸をした。

「あれ、お姫様はもうおやすみかな？」

窓の外から、優しい声。

愛しい人が、花束片手に佇んでいた。

「……あと十秒遅かったら眠っていたわ、王子様」

「よかった、じゃあぎりぎり間に合ったんだね」

微笑みながら、ルイは窓から家の中に入り、クラリサを抱きしめた。

「会いたかったよクラリサ」

「私もよ、ルイ」

とろとろとろ。

会えた喜びに、心が満たされていく安心感。その所為か、コーヒーでぎりぎり抗っていた睡魔が瞼を落としにかかる。

「……ふぁ」

「まだ眠らないですよ？ 今日には渡したい物があるんだから」

もう少しだけ我慢して、とルイはクラリサの頭を撫でる。

「取り敢えず、花瓶を出してもらえるかな？ この花は出来れば、食わずに愛でて欲しいからね」

そう言って、ルイは優しく微笑んだ。

*

花瓶に美しく活けられた花を見つめ、クラリサはわずかに首を傾げた。

かすみ草、カーネーション、クラスペディアにスターチス。

正直、クラリサにはこの花が何を意味するものなのかさっぱり分からなかった。花束は良く貰っていたけれど、『食わずに愛でて欲しい』などと言われたのは初めてだったのだ。クラリサは草食だ。

今までは、うつかり貰った花を食べてしまったと言う事があっても、ルイは少しも気にしなかった。それどころか、どの花が美味しかった？ などと聞いて来て、次の日におやつ用としてまた同じ花を買ってくる事もあったくらいだ。

「ねえルイ、これ、何か意味があるのよね？」
「もちろん」

語尾にハートマークでも付きそうな口調で、ルイは頷いた。そして、花瓶の花をひとつ、ちよんとつついた。

「クラスペディアの花言葉は、『永遠の幸福』」
言って、クラリサの瞳をそつと覗きこむ。

「それから、かすみ草は『清らかな心』、カーネーションは『貴方を熱愛します』、そして、スターチスは『永遠に変わらない心』と、『変わらない誓い』」

ひとつ息を吐いて、ルイは続けた。

「意味、分かるよね？」

「……貴方は本当に恥ずかしいわね！」

まるでストレリツチアみたいだわと呟くと、クラリサは赤く染まった頬を隠すように、小さな手のひらで顔を覆った。

「僕は君に恋をしているからね。伊達男は、本気になると一途なんだよ？」

ストレリツチアの花言葉は、『恋する伊達男』。

ルイはクラリサの反応を楽しむように見つめながら、小さな箱を取り出した。

「ねえクラリサ。どうか、受け取って」

差し出された箱をちらと見て、クラリサは無言のまま、ルイに左手を差し出した。右手は真っ赤な頬を隠す為に、まだ顔を覆っている。もっとも、クラリサの小さな手では隠し切れてはいなかったが。「ほんと、クラリサはかわいいよね」

「貴方と居ると早死にしそうだわ、恥ずかしすぎて」

「それは困るなあ」

くすくすと笑いながらルイは箱から銀色の指輪を取り出して、クラリサの薬指にそつと通した。そして、その細い銀色にひとつ、優しい口付をした。

「永遠の幸福を、永遠に続く愛を、永遠に変わらぬ心で貴方に誓い

ましょう」

紡ぐ言葉は真剣そのもので、じっと見つめてくる金色の瞳はわずかな緊張と期待をはらんでいて、左手を握る手は酷く熱くて。クラリサは左手に伝わる微かな震えと確かな熱に小さなため息を零し、少女漫画みたいねと呟いた。そして顔を覆っていた手を離してルイの頬に添え、静かに微笑む。

「私、白無垢が着たいわ」

「うん」

「ウェディングドレスも着たいし、お色直しはとびつきり華やかなドレスが着たい」

「うん」

「私、きつと誰よりも我儘よ？」

「いいよ」

その言葉に、クラリサはありがとう、と呟いた。

「結婚したら、ずっと一緒に居れるね」

「生活は合わないだろうけどね」

うん、とルイは頷く。けれどにこりと笑って、でもさ、と言葉をつづけた。

「でもさ、一緒に居れば『おはよう』のキスが出来るんだ。

『おやすみ』のキスも、もしかしたら『行ってきます』や『ただいま』のキスも」

「素敵ね」

「目が覚めた時、隣に愛しいぬくもりがあるのって、きつとすごく嬉しいことだと思うんだ」

言いながら、ルイは子供のような幼い笑みを浮かべた。幸せに満ちた、暖かな笑み。その表情に、クラリサはただ静かに頷いた。夢や理想や憧れを織り交ぜながら、二人の未来を語り合う。ただそれだけのことが嬉しくて、近い未来に現実となる言葉達に、そつと目を綻ばせた。

「……ああ、もう」

「どうしたの？」

クラリサはルイに寄りかかり、不機嫌そうに唇を尖らせた。

「幸せなの」

「うん」

「もつと幸せを感じたいのに、感じて居たいのに、もう眠たいの」

「それじゃあ、一緒に眠ろうか」

ルイの顔をちらと見上げ、クラリサは首を傾げた。そして、貴方は活動を始めたばかりでしょう？ と問いかける。

「僕が、可愛いお姫様と添い寝したいんだよ」

良いでしょ？ という言葉にクラリサはまた顔を赤く染め、仕方ないわねと頷いた。

遠距離恋愛も、また一興。

今はこの優しいぬくもりを甘んじて享受しようと、クラリサはそっと目を閉じた。瞼に落とされる唇の熱さに満たされていく。夢見心地の幸せの中で、クラリサは静かに眠りについた。

*

穏やかに眠るクラリサの姿に、ルイはひとつ、ほつと息を吐いた。いつも時間の合わない恋人への告白。活動時間が正反対で、けれど生態の関係でそれはどうにもならなくて、受け入れてもらえないかもしれないと密かに恐れていた。

たぶん、きつと、夜行性は夜行性同士、昼行性は昼行性同士でくつついた方が楽なのだろうと思う。同じような生活サイクルで暮らしている相手と一緒にの方が、気も使わずに済むだろう。けれど愛しい想いは生態と同じくらいどうにもならなくて、抑えられなくて、伝えずには居られなかった。

時間的遠距離恋愛。

そう称されるほどのすれ違い。なのに、彼女はすぐに受け入れてくれた。その事が嬉しくて、愛されてるなあ、と頬が緩む。いつま

でも長く、いつまでも互いに寄り添って行けますように。花の言葉に想いをこめて、愛しい気持ちを言の葉にこめて、彼女の笑顔に満たされて。

静かな寝息を零すクラリサをそっと抱きしめ、ルイは良い夢を、と額にひとつ、キスをした。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0854r/>

花の言葉に思いを込めて

2011年5月31日12時13分発行